

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 金 恩愛

金恩愛（キム・ウネ）氏の博士論文「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」の審査結果について報告する。

本論文は、「あることがらを言語上でいかに表現するか」という、表現のありかた、あるいは表現の志向性の総体を「表現様相」と呼び、日本語と韓国語の表現様相について分析を行ったものである。特に、日本語では名詞を用いた表現が自然に成立するところで、韓国語では動詞・形容詞を用いる必要がある、あるいはその方が自然である例がしばしば見られることから、このような対応を「日本語は名詞表現を志向し、韓国語は動詞表現を志向する」という表現様相の違いと捉え、日本語の「名詞志向構造 (nominal-oriented structure)」と韓国語の「動詞志向構造 (verbal-oriented structure)」について、実例に基づく包括的な記述を試みている。

本論文は8つの章からなり、第1章から第4章では研究の基本的な方向性を述べ、第5章から第7章では言語資料に基づく量的、質的な分析を通して具体的な考察を行っている。まず、第1章では、研究背景と本論文の課題および各章の内容について述べている。第2章では本論文で扱う言語現象と先行研究について述べ、先行研究の問題点として、「日本語では韓国語に比べ名詞表現が好まれ、韓国語では日本語に比べ動詞表現が好まれる」という主張があるものの、包括的な記述がなされていないこと、扱っている資料が限定されており根拠となる客観的なデータ等が示されていないことなどを指摘し、ある特定の「言語場」のもとで、日韓両言語がいかなる表現を選択するのかを客観的に分析する方法が必要であると主張した。

第3章では、分析の根幹となる言語資料と研究方法について述べている。本論文では日本語を基準言語として「日本語の名詞表現が韓国語ではいかに現れるか」について詳細な観察・記述を行う。分析のもととなる言語資料は、日本語資料とその韓国語版翻訳テキストの使用、著者・翻訳者の重複の回避、テキスト類型を小説に限定、作家の出身地、作品の描く時代、発表年代を限定し、さらに得られた資料の計量調査も行うことにより議論の客観性を高めるとしている。

第4章では、日本語の名詞に関する諸説を参照しながら、本論文における名詞表現の捉え方を示した。本論文では名詞の性質から「名詞的な名詞」「形容詞的な名詞」「動詞的な名詞」「副詞的な名詞」という4つの下位範疇を設定し、また意味の重層性という観点から、「雨」のような単純語を<軽名詞(light noun)>、「家族思い」のような複合名詞や派生名詞を<重名詞(heavy noun)>として区別した。さらに、「機能用言(function verb)」「実質用言(meaning verb)」の区別、名詞表現における名詞性の段階性にも着目し、分析を進めるとした。

第5章では、日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造に関する全体的な様相を示している。①主語、目的語という文の成分、②名詞の性質から見た名詞の下位範疇、③語彙的な意味の比重から見た<軽名詞>と<重名詞>、以上3つの観点を中心軸とし、日本語の名詞のどのような性質・構造・機能において、韓国語が動詞構造化するのかを考察している。その結果、文の成分の観点からは「述語>修飾語>目的語>主語」順に動詞構造化の傾向が強いこと、名詞の性質からは「形容詞的な名詞・動詞的な名詞」における動詞構造化が顕著であることを明らかにした。

第6章および第7章では、第5章で取り上げた日本語の名詞表現のうち、韓国語で動詞構造化が顕著であった類型について、さらに詳細な分析を行っている。第6章では、「名詞類+する」の分析を行い、分析の対象となる前項要素（名詞類）を「名詞部分」と「助詞部分」とに分け、日韓両語の一致・不一致を調査している。調査では、前項要素において①名詞、助詞といった品詞の一致、②漢語・和語といった語種の一致、の2つの基準を設け、さらに「する」については、

韓国語で「hata(lit. する)」が対応する場合は「対称構造」、「hata」以外が対応した場合を「非対称構造」と分類し、日韓両語の対応関係を綿密に探ろうとした。その結果、日韓両語の構造が一致する場合は34.1%に止まっており、残りの65.9%では何らかの表現のずれが生じていた。ずれの中でも、①分離用言における表現様相の違い（「結婚してしまったね」「kyelhon-ul ha-ko mal-ass-kuna (lit. 結婚をしてしまったね)」）、②代用形(pro-form)の使用（「いつにする？」「encey manna-llay? (lit. いつ会う?)」）におけるずれが目立つことを指摘している。

第7章では、日本語の「～さ」を使った名詞構造が韓国語でどのように現れるかを考察している。日本語の名詞表現に対して、韓国語でも名詞表現で現れた例は65.3%であり、残りの34.7%は名詞表現以外の形で現れた。分析の結果、①列挙、対比、比喻の対象となる「～さ」派生名詞や、「<その新鮮さ>を」のように、[指示連体詞+～さ]という構造の「～さ」派生名詞は、韓国語では名詞形成語尾「-m」の形で現れる傾向が強いこと、これに対し、②[体言+の+～さ]という構造における「～さ」派生名詞は、韓国語では語順の変化などを伴って用言構造化する傾向が強いことがわかった。さらに、③「高さ」「広さ」「厚さ」といった尺度名詞が尺度名詞としての中立性を失い程度性が強くなると韓国語では用言構造化する傾向が強いことを指摘している。

最後に第8章では、本論文を総括した上で本論の意義について確認し、本研究の課題と今後の展望について述べている。

本論文の特徴は大きく3つあると考える。第一は、従来部分的な現象に基づいて論じられていた日本語の名詞志向性と韓国語の動詞志向性について、包括的な分析を行った点である。その結果、両言語におけるずれが全体の中のどの部分で生じているかを明らかにした。第二に、従来は作例や一部の用例だけで論じられていた問題を、厳密に選んだ資料からの用例をもとに量的、質的に分析した点である。量的な分析で日韓両語での表現のずれが実際にかなりの割合になることを実証し、質的な分析で両語のずれをもたらす要因がどこにあるのかを指摘したことは、名詞志向性・動詞志向性の議論を進める上での土台を築いたと言ってもよく、今後の研究は本論文の成果を参考にして進めていくことになろう。第三は、日韓両語の表現様相を分析するための方法論を提示した点である。基盤言語と対照言語の区別、文の成分、名詞の下位範疇、〈軽名詞〉〈重名詞〉の区別など、客観的な基準に基づいて表現構造を分類し分析を行ったことは、今後表現様相の研究を行うにおいて、参照すべき点になるであろう。本論文は、以上の特徴から従来にない新たな視点を切り開き、今後の研究の土台を築いた研究と言え、日韓対照研究を大きく進める研究であることは間違いない。さらに、日本語学、韓国語学、表現様相の研究においても大きく貢献するものである。

審査においては、韓国語を基盤言語とした分析が行われていないこと、対応する場合と対応しない場合の違いについての分析が不足していること、用例の中に慣用句の例も挙げている点については検討を要すること、重名詞の結合度の違いについてさらなる説明が必要なこと、分析結果を羅列したような印象を受けるので問題点の一覧を示すなど書き方に工夫が必要であること、分析結果について通言語的な分析が望まれること、などの指摘もなされたが、それらが本論文の価値を損ねるほどのものではないことが確認された。

したがって、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。